

## 特集にあたって

本号では「子どもと音環境」と題して保育施設、学校施設を取り上げた。日本建築学会の環境基準で音環境分野において一番はじめに検討されたのは、2008年に発行された「学校施設の音環境保全規準・設計指針」(以下、学校施設のAIJES)だった。心身の健康な発達を育む学校において、その音環境の整備は重要な課題であり、また学校にある様々な室についての音環境の考え方は、他の公共施設の参考になる室も多く、AIJESでもっとも早く検討された意義は大きい。

音響技術ではNo.131において、発行前のパブリックコメント段階での「学校施設のAIJES」の案をいち早く取り上げてご紹介していただいた。その「学校施設のAIJES」は発行から5年を経過して改定が検討され、初版では盛り込まれていなかった保育施設に関する推奨値や設計指針をはじめとする追加が行われ2020年に改定版が発行された。そこで、それらの追加事項のご紹介をいただくとともに、子どもを取り巻く現状の音環境や、最近の設計事例などを取り上げて、子どもと音環境という特集を企画することとした。

「1. 総論」では、まず発達期における音環境の重要性についての再確認という趣旨から、「音声言語に関わる子どもの発達と音環境について」ご紹介いただいた。また保育現場からの音環境についての声を、インタビューという形でご紹介いただいた。さらには研究者から「こどものための音環境の現状と課題」として新設される保育施設例やそれにまつわる音環境の現状をご紹介いただき、建築計画の立場から「建築計画・環境行動研究からみた保育の音環境計画」として海外の事例なども参考に、計画上、配慮すべき空間や幅広い配慮についてご紹介いただいた。

「2. 学校・保育施設の設計」では、2020年の改定で追加された内容について、発行に関わられた方々にご執筆いただいた。「保育施設の音環境」では、保育施設における音環境の重要性について説明いただき、世界各国での規準、規格の状況なども含め、保育施設の音環境保全規準・設計指針の概要をご紹介いただいた。「特別な支援を必要とする子どもの学習環境」では、初版で盛り込まれていた難聴学級にくわえ、改定版で盛り込まれた知的障害や発達障害などの特別支援教育を行う施設に対する推奨値や設計指針について、その背景や概要をご紹介いただいた。「音響的な配慮を要

する室の設計：木造」、および「音響的な配慮を要する室の設計：鉄骨造」では、現在の建築の動向に即し、実務において有用な指針となる情報をご紹介いただいた。ご紹介いただいた内容を、「学校施設のAIJES」本編とともに読んでいただくことにより、さらに理解を深めていただけると考える。

「3. 子どものための施設の設計事例、改修事例」では、実際のいろいろな事例をご紹介いただいた。施設計画における音環境の考え方や実際の吸音構造設置例、「学校施設のAIJES」を指針とした設計など、またいくつかの施設を経験された中からの音環境配慮への考え方や、音響面での改修が行われた事例検討、室内音響的な配慮で欠かすことのできない吸音材の施工事例もご紹介いただいた。保育施設、学校等いろいろな施設が含まれており、実際に設計する際の参考資料として貴重な情報をいただいた。

いま求められている新しい生活下、例えば家ででの時間が長くなったことで今まで気がつかなかった音に気づいたり、また人が集まることが避けられている中、音声によるコミュニケーションの重要性が増すなど、音環境の重要性についての認識は高まってきているのではないだろうか。健やかな発育を促すために保育・学校施設での音環境の整備が進むとともに、さらにはいろいろな施設での音環境向上が促進されることを願いたい。

最後に、今まで音響技術で取り上げてきた保育施設、学校施設に関わる特集を次に示す。

- 学校建築の音響  
No.26(Vol.8 no.2 1979年4月)
- 体育館の音響  
No.52(Vol.14 no.4 1985年12月)
- 教育施設の音響設計  
No.103(Vol.27 no.3 1998年9月)
- 吸音材料の選定/学校施設における音環境  
No.131(Vol.34 no.3 2005年9月)
- 教育・保育施設の音環境  
No.176(Vol.45 no.4 2016年12月)

(特集担当：石渡智秋(文責)、平光厚雄)